

# 線の造形、線の空間

飯塚琅玕齋と田辺竹雲齋でめぐる竹工芸



飯塚琅玕齋「花籃」1936年頃



初代田辺竹雲齋「柳里恭花籃」1925年

LINES AND SHAPES, LINES AND SPACES  
THE BAMBOOWORK OF IIZUKA RŌKANSAI AND TANABE CHIKUUNSAI

2018年4月14日（土）～7月16日（月・祝）

菊池寛実記念 智美術館  
〒105-0001 港区虎ノ門4-1-35  
TEL : 03 - 5733 - 5131  
展示担当：島崎慶子

◆プレスプレビューのご案内は最終ページにあります。

## 「線の造形、線の空間—飯塚琅玕齋と田辺竹雲齋でめぐる竹工芸」開催概要

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、私ども菊池寛実記念 智美術館の活動にご理解とご協力を賜り、誠に有難うございます。

さて、このたび、当館では、2018年度第一回目の展覧会として4月14日より7月16日の会期で、「線の造形、線の空間—飯塚琅玕齋と田辺竹雲齋でめぐる竹工芸」展を開催いたします。

竹工芸の作品は、しなやかで強靱な竹の特性を生かし、<sup>へんそ</sup>編組技術によって形づくられます。竹を割り、削って加工した多様な「線」は豊かな表情や質感を示し、作品に応じて選ばれ、巧みに用いられます。そして「線」の連なりは、構造と同時に装飾ともなり、空間を包み透かして立ち上がる竹の造形を創出するのです。

竹工が職人的な技芸を超えて、個人の表現として追求されるようになるのは大正、昭和期のことです。本展では、その時期に東京を拠点に活躍した飯塚琅玕齋（1890 - 1958）と大阪・堺を拠点に活躍した初代田辺竹雲齋（1877 - 1937）を中心に、琅玕齋の兄・二代飯塚鳳齋（1872 - 1934）、琅玕齋の息子・飯塚小玕齋（1919 - 2004）、そして二代竹雲齋（1910 - 2000）、三代竹雲齋（1941 - 2014）、四代竹雲齋（1973-）の作品を展示します。

初代田辺竹雲齋は、江戸時代末期から明治に流行する煎茶道の精神を基礎に、その中心地である大阪の堺で活動し、高度な技術で精緻に編んだ唐物風の制作で名を馳せました。そして同時に唐物を脱した独自の制作を追求し、竹工芸の表現を前進させます。一方、初代竹雲齋の次の世代になる飯塚琅玕齋は、兄・二代鳳齋のもとで家業として竹の仕事に従事するも二十半ばで独立し、若い頃から芸術としての竹工芸を求めました。創意に満ちたその制作は竹の造形表現に大きな足跡を残し、二代竹雲齋、小玕齋をはじめ次の世代の制作に影響を与えます。そして三代、四代竹雲齋へと現代の制作に繋がっていくのです。

二つの家系の作家7人の作品120点余によって、大正、昭和、そして現在までの竹工芸作品を見渡し、各作家が既存の技法や前の世代の制作を革新させてきた「線」による立体造形の魅力をご紹介します。

つきましては、この展覧会を多くの皆様にお知らせいただき、周知にご協力を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

謹白

- |        |  |
|--------|--|
| ○展覧会名  | 「線の造形、線の空間—飯塚琅玕齋と田辺竹雲齋でめぐる竹工芸」展  |
| ○会 期   | 2018年4月14日(土)～2018年7月16日(月・祝) 開館日数80日  |
| ○観 覧 料 | 一般1,000円／大学生800円／小中高生500円  |
| ○主 催   | 公益財団法人菊池美術財団、日本経済新聞社   |
| ○会 場   | 菊池寛実記念 智美術館（〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-1-35 西久保ビル）  |
| ○開館時間  | 午前11時から午後6時まで（入館は午後5時30分まで）  |
| ○休 館 日 | 毎週月曜日（ただし4月30日は開館）、5月1日（火）、6月5日（火）   |
| ○展 示 替 | 会期中に展示替えをいたします   |
| ○展示内容  | 飯塚琅玕齋と初代田辺竹雲齋を中心に120点<br>[東] 飯塚琅玕齋（1890-1958）、二代飯塚鳳齋（1872-1934）、飯塚小玕齋（1919-2004）<br>[西] 初代田辺竹雲齋（1877-1937）、二代（1910-2000）、三代（1941-2014）、四代（1973-） |

# 作家紹介

飯塚琅玕齋 (いづか・ろうかんさい)



「盛籃 雲龍」1947年

(1890-1958) 初代鳳齋の六男。12歳の頃より父鳳齋の手ほどきを受け、二十歳前からは兄・二代鳳齋の代作を務めるまでになるも独立し、自身の作風を確立させ竹の造形表現に大きな影響を与えた。作品の様態に真・行・草の三態の概念を導入し、作品は明晰で創意にあふれる。

二代飯塚鳳齋 (いづか・ほうさい)

飯塚小玕齋 (いづか・しょうかんさい)



(1919-2004)

琅玕齋の次男。琅玕齋から継承した竹刺編を完成させ、また束編、氷烈編など多岐にわたる技法を駆使し、独自の作風を模索した。1982年、六十三歳で、九州の生野祥雲齋に続き、史上二人目の重要無形文化財「竹工芸」保持者に認定された。



(1872-1934)

初代鳳齋長男。籠師として唐物を範としながらも独自の造形を求めると同時に、工房の長としても外交的に活動し、次世代の琅玕齋や他の竹工家の活躍の地盤を築いた。



「華籃 氷裂」平成初期

「花籃」大正初期

## 初代田辺竹雲齋



(1877-1937) 尼崎藩、藩医の三男。12歳で籠師として著名であった大阪の

初代和田和一齋に師事。関西では中国の文人思想を基盤とした煎茶文化が興隆し、その道具として竹籠の制作が盛んになった。初代は唐物を範とした精緻で格調高い作風で知られるが、同時に、粗いランダムな編み方や古い竹製の矢(古矢竹)を用いた独自の制作を追求し、二代へと竹雲齋の仕事を繋げた。



「古矢竹鐘綴花籠」1930年



「輪違縁甚句花籠」

## 二代田辺竹雲齋



(1910-2000)

初代の長男として生まれる。初代の作風を受け継ぎながら、唐物とは異なる透かし編みのシンプルな



「雲花籠」1959年



「線紋提梁花籠」1957年



「螺旋紋花籠」1952年

造形や荒編みによる動感ある造形で独自の作風を確立した。琅玕齋とともに、竹工芸の表現の発展に寄与し、その後の竹雲齋の作風にも革新性もたらした。

## 三代田辺竹雲齋



(1941-2014)

二代の長男として生まれる。初代、二代の作風を受け継いで確かな技術に裏付けられた精緻な籠作品を制作するとともに、独自の作風を模索する。そして、矢竹を丸竹のまま用いて、直線の集積で面を創出した用途のない造形を打ち出した。



「未来への歓喜」1972年

## 四代田辺竹雲齋



「舟形花籃 帆風」2016年



「CONNECTION」 ジャパン・ハウス サンパウロでのインスタレーション 2017年

©ジャパン・ハウス サンパウロ事務局 / Rogério Cassimiro

(1973-) 三代の次男として生まれる。

1999年 東京藝術大学美術学部彫刻科 卒業。

2000年 大分県竹工芸訓練支援センターで2年間技術を学ぶ。

2017年 四代を襲名。

初代、二代、三代それぞれの作風を竹雲齋の仕事として受け継ぎ、自身の解釈で展開している。また、用途を超え、竹を素材とした造形を追求しており、その代表的な制作がインスタレーションである。竹の線を密集させ、うねり、絡まる造形には迫力がある。「繋がり」をテーマに制作し、竹工芸への興味を喚起し、広く世界と繋がっていかうという作家の意欲が表れている。

四代竹雲齋には、インスタレーションを当館のシンボルであるガラスの手摺の螺旋階段に制作していただきます。

インスタレーションによって、現在における竹工芸の革新性をかたちにし、過去と現在、そして未来への繋がりを象徴します。



菊池寛実記念 智美術館 螺旋階段

## ●日本人の知らない竹工芸●

竹工が職人の仕事を越え、個人の表現として追求されるようになるのは大正、昭和期のことです。江戸時代末期から明治にかけて中国からもたらされた煎茶文化が興隆し、唐物の道具が珍重されると籠師と呼ばれた職人たちは唐物を写した精緻な編みの竹籠を制作するようになります。やがて大正時代に起こった工芸の近代化に伴い、竹工においても唐物写しを脱して、伝統技法や先達の制作を革新させた創意ある作品が作られるようになります。

中国では唐物籠以降の展開が見られず、編み組み技術による竹工芸は国内で独自に発展しながら日本固有の工芸分野となりました。しかし、その認知は、日本国内よりもむしろ竹が自生しない欧米を中心とした地域の方が高いようです。

近年、竹工芸の展覧会が海外で頻繁に開催され、好評を得ています。竹工芸の主なコレクターは欧米人で、鑑賞の切り口は個人によって異なるといいます。日本美術への興味から、現代美術の感性、バスケットリーをはじめテキスタイルの方向からなど様々な見地からその造形美が鑑賞されています。個人コレクションは国立美術館に寄贈されることもあり、展示の機会を得て、日本の文化を紹介する上で貴重な資料となっています。

### ◆近年 海外で開催された竹工芸展

2016年4月 田辺小竹（四代竹雲齋）インスタレーション（フランス国立ギメ東洋美術館）

2017年5月～7月 「竹—日本の歴史」展（ジャパン・ハウス サンパウロ／ブラジル・サンパウロ）

**来場者 約2カ月間で約19万**

2017年6月～2018年2月 「Japanese Bamboo Art: The Abbey Collection」（メトロポリタン美術館／NY）

**入館者 約6カ月間で40万人超**

2018年秋予定 ケ・ブランリー美術館（フランス・パリ）

一方、日本国内での展覧会の開催は、栃木や大分といった竹工芸、竹細工の歴史がある地域に限られる傾向があり、全国的には鑑賞の機会が少ないのが現実です。工芸全般を紹介する展覧会で竹工芸作品が展示されることはありますが、竹工芸に特化した展覧会を東京の美術館で開催するのは、1985年の東京国立近代美術館開催「竹の工芸 近代における展開」展以来、33年ぶりのこととなります。

### ◆近年、日本で開催された展覧会

2012年9月～10月 「竹工芸の継承・革新」（大分県立芸術会館）

2013年4月～6月 「Lundy Collection 近代竹工芸の誕生 二代鳳齋と琅玕齋を中心に」  
（とちぎ蔵の街美術館）

2014年11月～12月 「竹のめざめ」（栃木県立美術館）

2016年4月～6月 「竹工芸の人間国宝 勝城蒼鳳展」（井原市立田中美術館／岡山県）

2017年9月～10月 「生誕45年 竹工芸家・二代飯塚鳳齋」（とちぎ蔵の街美術館）

2017年12月23日～2018年1月28日 「伝統の技、革新の表現一堺の竹工芸」（さかい利晶の杜／大阪府）

## ■関連行事■

### ◆スペシャルトーク

ギャラリートーク形式でお話しいただきます。

5月19日(土) 15時～「竹雲齋が継承するもの」4代田辺竹雲齋氏

6月16日(土) 15時～「琅玕齋を中心に飯塚家の制作について」鈴木さとみ氏(栃木県立美術館 学芸員)  
ご来館のお客様はどなたでもご参加いただけます。(予約不要・要入館券)

### ◆こども鑑賞会

小さいときから美術館で過ごしてほしい!

お子様と保護者の方に向けた鑑賞会です。

6月9日(土)

14時から1時間程度

定員: 10組25名様、お申込制→TEL: 03-5733-5131

年齢: 4歳～小学6年生(保護者の方ご同伴のこと)

参加費: こども無料、保護者の方は一般入館料1,000円(当日観覧券をお持ちの場合は無料)

講師: 富田めぐみ氏(NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表)

### ◆ナイトミュージアム

#### 軽井沢演劇部による朗読劇

閉館後の展示室を会場に、朗読劇をお楽しみいただきます。

6月30日(土) 18時30分より(開場18時20分) 当館B1展示室にて

出演: 軽井沢高原文庫 軽井沢演劇部

<矢代朝子・山本芳樹(Studio Life)・岩崎大・(Studio Life)・坂本岳大>

会費: 4,000円(観覧料含む、当日観覧券をお持ちの場合は3,000円)

定員: 60名様

4月17日(火)よりお申し込み受付開始→TEL: 03-5733-5131

※演目は当館HPでお知らせいたします。

詳細はお申し込み受付後にお手紙をお送りいたします。

### ●学芸員のギャラリートーク

いずれも土曜日14時より

4月21日/5月5日、12日/6月2日/7月7日

### ●西洋館見学会 定員20名様・お申込制

5月26日(土)、6月23日(土) 11時より

会費: 8,000円 西洋館のご案内(建築家 篠田義男氏による)、美術館観覧料(学芸員の解説付き)、レストラン ヴォワ・ラクテでのランチを含みます。

当館施設内にある西洋館(登録有形文化財)は大正時代に建てられました。修復を重ねながら建具等の室内装飾を保全し、今日まで使用しています。通常は非公開の内部を上記の日程で限定公開します。

お申込制→TEL: 03-5733-5131

■本展覧会について広報媒体へ掲載、取材をいただく場合、本リリースに紹介されている作品画像をデータでお貸し出しいたします。申込書のご希望の図版に☑を記し、用紙を返信のうえ、お問い合わせください。ご紹介いただく記事、番組内容については、情報確認のため校正の段階で事務局までお知らせください。お貸し出す画像データは本展覧会終了をもって使用期限とさせていただきます。作品の画像を1点以上ご掲載の上、本展をご紹介くださる媒体に対し、本展ご招待券を読者プレゼント用に提供いたします。申込書、所定の欄に招待券希望の旨を明記してください。

掲載に関するお問い合わせ先 菊池寛実記念 智美術館 (担当：島崎)

TEL.03 (5733) 5131 FAX.03 (5733) 5132 <http://www.musee-tomo.or.jp/>

## 掲載・画像貸出申込書

返信先 FAX : 03-5733-5132

### ●貴社基本情報

会社名:	
担当部署:	担当者名:
住所:	
電話	ファックス:
E-MAIL:	

### ●媒体情報

新聞 雑誌	媒体名:	
	発行日:	発売日:
TV ラジオ	媒体名:	
	放送日:	放送時間:
ネット	URL:	

### ●画像貸出リスト ※キャプションには作者・作品名・制作年・撮影者を必ず入れてください。

希望作品に☑	作品キャプション
<input type="checkbox"/>	飯塚琅玕齋 「花籃」 1936年頃 H31.5×33.0×32.5 cm (撮影:消忠之) ※表紙の作品
<input type="checkbox"/>	初代田辺竹雲齋 「柳里恭花籃」 1925年 H58.5×31.5×31.5 cm (撮影:消忠之) ※表紙の作
<input type="checkbox"/>	飯塚琅玕齋 「盛籃雲龍」 1947年 H24.5×54.5×54.5 (撮影:消忠之)
<input type="checkbox"/>	飯塚鳳齋 「花籃」 大正初期 H88.5×23.5×23.5 (撮影:消忠之)
<input type="checkbox"/>	飯塚小玕齋 「華籃 氷裂」 平成初期 H25.5×52.5×21.0 cm (撮影:消忠之)
<input type="checkbox"/>	初代田辺竹雲齋 「古矢竹鎧綴花籃」 1930年 H54.0×20.0×20.0 cm (撮影:消忠之)
<input type="checkbox"/>	二代田辺竹雲齋 「螺旋紋花籃」 1952年 H17×48.0×48.5 (撮影:消忠之)
<input type="checkbox"/>	三代田辺竹雲齋 「未来への歓喜」 2009年 H69.0×81.5×26.5 cm (撮影:消忠之)
<input type="checkbox"/>	四代田辺竹雲齋 インスタレーション→キャプション詳細は画像と共にお送りいたしま

●読者プレゼント用チケット希望: 5組10名様 10組20名様

# プレスレビューのご案内

展覧会の趣旨、作品解説など、内覧会に先立ちましてプレスの皆様にご説明申し上げます。  
ご多用のなか恐縮に存じますが、どうぞご出席くださいますようお願い申し上げます。

菊池寛実記念 智美術館

プレスレビュー 2018年4月13日(金) 14:00～

14:00～14:45 展示室にて、展覧会のご説明、作品解説を行います。  
展覧会の会場内をご撮影いただけます。

14:45～15:00 皆様からのご質問にお答えいたします。

会場：菊池寛実記念 智美術館 〒105-0001 港区虎ノ門 4-1-35 西久保ビル B1  
・日比谷線・神谷町駅出口 4b より徒歩 6分  
・南北線・六本木一丁目駅改札口より徒歩 8分  
・南北線／銀座線・溜池山王駅出口 13 より徒歩 8分  
・銀座線・虎ノ門駅：出口 3 より徒歩 10分

ご出席いただける場合は、下記フォームにご記入の上、FAXにて

ご返信下さい。**返信先 FAX 03-5733-5132**

会社名：	
担当部署、氏名	
住所：	
電話：	FAX：
Email	